

第1回埼玉県総合教育会議議事録

1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成27年5月13日（水） 午前10時開会
午前11時32分閉会

2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

高木康夫委員長、藤崎育子委員長職務代理者、志賀周子委員、門井由之委員
関根郁夫教育長

4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

伊東弘道総合調整幹、畠山真一総合調整幹、柳沢伸明知事秘書担当主幹
五味浩報道長主査

○教育局の出席者

櫻井郁夫副教育長、柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長
安原輝彦市町村支援部長、塩野谷孝志教育総務部副部長、高田直芳県立学校部副部長
小澤健史県立学校部副部長、松本浩市町村支援部副部長、吉田正市町村支援部副部長
大根田頼尚教育政策課長、栗原正則総務課報道幹、飯村光良教育政策課副課長
阿部正浩教育政策課副課長

5 会議に付議した事項

(1) 要綱等の決定

ア 埼玉県総合教育会議の運営に関する要綱（案）

イ 埼玉県総合教育会議傍聴要領（案）

ウ 報道関係者の傍聴に係る運用（案）

（２）埼玉教育の針路

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

○関根教育長 それでは、ただいまから第1回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

本日の第1回会議は、まず会議の運営に関する要綱等につきまして決定していただく必要がありますので、議事の（１）要綱等の決定まで私のほうで進行させていただきます。よろしくお願いいたします。

○関根教育長 会議の運営に関し、必要な事項は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に定めるもののほか、この総合教育会議で定めることと規定されています。

決定していただく事項は、次第の2の（１）にあります、アの埼玉県総合教育会議の運営に関する要綱（案）及びイの埼玉県総合教育会議傍聴要領（案）、そしてウの報道関係者の傍聴に係る運用（案）でございますが、関連しますので一括してお諮りさせていただきます。

これにつきましては、皆様方に事前にお目を通していただいていると思いますので、特に御意見がなければ、案のとおり決定したいと思います。よろしいでしょうか。

〔「はい」という声あり〕

○関根教育長 ありがとうございます。

それでは、この案を取らせていただきます。

また、今後も軽微な改正が必要になった場合につきましては、運営要綱につきましては知事の専決ということで、そして傍聴要領につきましては、教育長が専決をして、直近の会議で報告させていただきたいと思いますが、こちらもよろしいでしょうか。

〔「はい」という声あり〕

○関根教育長 ありがとうございます。

それでは、ただいま運営要綱及び傍聴要領等につきまして決定をいただきましたので、ここで冒頭の撮影をした後に傍聴人を入れさせていただきます。よろしくお願いいたします。

〔傍聴人入場〕

○関根教育長 それでは、議事の（２）埼玉教育の針路につきまして上田知事をお願いいたします。

○上田知事 改めましておはようございます。

今日は教育委員の皆様にはお忙しい中、御参集いただきましてありがとうございます。

限られた時間ですけれども、活発な意見交換を行っていきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

「埼玉教育の針路」という少し大げさな言葉を使っていますが、私自身の若干の問題意識を左側（資料「埼玉教育の針路-不易流行-」の「一人一人がより一層大切な『人財』」の部分）のほうに、よく教育では「不易流行」という言葉があります。変えてはならないものは変えない。また、世の中で大事なものはしっかり守っていかなくてははいけない。一方、社会状況の変化によって、いろんな制度の枠組みを変えたり、マイナーチェンジをしたり、新しいものを導入したり、いろんなことをしていかなくてははいけないと思ひています。

そこでやはり私が産まれた年代は260万人の同級生がいましたが、現在、直近の赤ちゃんというか100万人、しばらく減る傾向にあると思ひますので、極めて小さな子供たち、あるいは小中高、大学生を含めて貴重な人財だと考へて、一人一人の個性が活かされて社会にそれぞれ役に立つというのでしょうか、社会に貢献ができる、自分自身の自己実現もできて、なおかつそのことが社会にとってもいい傾向になる。そういう子供たちを育成すべきだということで、左側のほうに。できれば自らの力で人生を切り拓き、自分の人生に満足できる生涯を送ることができるような人になってもらいたい、こんなふうに思ひています。マズローの言うところの五段階の最終段階、自己実現というところをやりたい。

一方で、まさに「什の掟」ではありませんけれども、「ならぬものはならぬ」、だめなものだめと、卑怯なふるまいはだめだと、弱いものいじめはだめと、暴力をふるってはだめだと、そういうことをきちんとものごとの基本を身に付けていかなくてははいけないと思ひております。

一方、そういう「ならぬものはならぬ」ですけれども、それぞれ世界各国には固有の歴史や民族の歴史があつたりしますので、あるいはまた日本国内においてもいろんな文化があつたりします。それぞれ個性を持っています。そういう個性を許容しなくてははいけない。多様な価値観を許容して付加価値を生み出すことができる。いろんな価値観があるからこそ新たな価値観を生み出すことができる。一つしかなければ、北朝鮮みたいに新たなことは生み出すことはできないもので、生み出そうとすると牢屋に行かなくてははいけなくなるから、そうではない。やはり多様な価値観を許容することで新しい価値観を生み出すこと

が可能になるのではないかと考えております。

地域や埼玉そして日本の将来を担って社会に役に立っていただきたいと思っています。自己実現をしながら、これはやはり恩返しというのがあると思っています。ただで生きていくわけにはいきません。例えば多くの方々は税金を払って、自分自身がしっかり社会に貢献していると思っておられるけれども、本音ベースで言えば、大半の人たちは自分の払っている税金以上に公的支援を受けています。幼稚園、保育園の段階であれば一人年間57万円、小学生だったら年間77万円、中学生だったら91万円、高校生だったら97万円、めったに97万円というような税金を払う人はいません。社会保険料を払っていても、平均給与所得の皆さんは大体60万円ぐらいです。したがって、保育園児、幼稚園児一人持った分ぐらいです。そのくらい社会の恩恵を受けているわけですから、やはりそれを返すという、社会に貢献できるというような、そういう価値を学んでいただきたいと思っています。

そしてやはり自分の住んでいるところ、産まれたところ、そして自分の県だとか、日本とか、自分の国の歴史とか文化に誇りを持っていただきたいと思っています。また、そういうことをしっかり教育すべきだと思います。世界から尊敬されるような人になってもらいたいと思っています。

ただ、注意しなければいけないのは、やはり各国の歴史、教育なんかを見てみますと、一般的に夜郎自大です。はっきり言って。日本ぐらいのものです。控え目なのは。しかしこの控え目な部分も悪くないと思っています。各国は自分のところが一番と言って、はっきり言えば大して一番でもなさそうなんだけれども、それでも江戸時代に明の歴史を教えています。ただ、もっと私たちは日本のよさをしっかり教えるべきだと思います。なぜ1,000年前に、紫式部がちゃんと1,000年前から文学がつくれたのか。しかも女流作家が出てきたのはほんの200年前だった。日本ではもう奈良・平安の時代から女流作家がいたのだということです。すごい社会だったんだということも教えたりすることは必要であると思っています。私自身はそう考えております。

一方では、やはり10年後どうなるかということなども意識しなくてはいけないと思います。もちろん教育は100年、200年、300年という、ずっと将来のことも考えるべきですけれども、中期的なことについてもまた考えていかなくてはいけないと思っています。

例えば10年後にどうなっているかということでは、人口動態がこうなりますねとか、

産業構造が変化していっていますね、それによってそれに合わせた形での技術教育が可能なのかどうかとか。あるいは子供が抱える課題などはどうなるのかとか、生活保護の子供たちは4分の1がまた生活保護になる。これをブロックしなくてはいけないということで今埼玉県は一生懸命やって、このモデルが厚労省で取り上げられて、国会で取り上げられて、法律になって全国の市町村がこれに取り組むことになりましたけれども、まさしくそういう課題もどうしていくかということを考えなければいけないと思っております。

下の段（資料「埼玉教育の針路-不易流行-」の「社会の中で役割を果たすことのできる『人財』の育成」の部分）は、既に埼玉県の中で行われていることを中心に、こういうのが今ありますよねという形で提起させていただきました。そのところはまさに日本の人口の将来推計とか、就労者の推移だとか、あるいは労働生産性がどうなっているのかとか、生活保護世帯数がどうなっているのかとか、要保護がどうなっているのかとか、埼玉の公立中学校3年生の将来推計がどうなっているか。全国の体力テストや学力テストの状況がどうなのか。

つまり埼玉県の子供たちの正しい位置を知ることで改善につなげていこうと思っております。私が就任したときに、高校の中退率が46位でした。これは困るねということで、やはり中退するよりもしっかり卒業してもらったほうがいいという考え方のもとで、体験学習などを取り入れながら丁寧な指導をしていただくということで、現在は全国で12番目に上がっている。あるいは中学生の不登校も全国で8番目に悪かったのですが、その事実を市町村の教育委員会では知らなかった。自分のところで何人出現しているのだということを知らなかった。それを丁寧に県の教育委員会を通じて、おたくで何人出ていますよということをはっきり市町村の教育委員長や教育長に伝えることによって大幅に改善されて、今ではワースト8からベスト8まで上がってきている。やはり正しく自分の位置を知る、そういう意味では、関根教育長が御努力いただいて、埼玉県独自の学力テストをやりながら、これは順番を決めるためにやるわけではありません。みんながやはりしっかり学ぶためにやるのであって、知らなければ伸ばしようがない。自分の実力、自分の学校の全体の実力、その立つ位置がわからなくて、頑張りましょうと言ったっていい成果が出るわけがありませんので、そういうほうの資料も入れさせていただきます。

もとより私のほうから問題提起をさせていただきました。

私以上というか、私はよくわからないので、知見のある皆さんたちから、まさに「不易流行」の不易の部分の理解度云々とかをどう継ぎ足していけばいいのか、ブラッシュア

ップすればいいのかの議論をしていただきたいと思いますし、その議論がある程度終わったら、中期の10年後の課題を、これもまた10年後の課題というのは、今手を打っておかないとなかなかできませんので、事務方がいいアイデアをここで頂けるように、そういうアイデアなどを提案していただければと思っていますところでは。

ということで早速御意見をいただければと思っております。

では左の不易のほうからいきましょうか。どうぞ。

○高木委員長 私のほうから、知事のお話にありました「不易流行」という部分で私も同感でありまして、知事がお産まれになったときには260万人の同級生があったというのが今は100万人だと。

○上田知事 260万人、今生きているかどうかわかりませんが。

○高木委員長 その数というのはすごいものだなと思ってるんですが、私はいろいろ地域のことに関わって今までの流れでいろいろやってきたんですけども、やはり昔、私の時代は大家族で育ったという印象が強いんですね。おじいちゃん、おばあちゃんがいて、両親がいて、我々がいる。それがどんどん時間がたってくると、今度は核家族化が進んで、今は逆に言うと核家族の中でも親子のコミュニケーションがなかなかとれなくなってきた。まさにこの辺が不易流行というところからも反しているのではないかなと常に思っています。

子育てとか、子供をどう育てるかというのを、これは私の考えなんですけれども、地域で育てるのではないかなと常に思っているんです。もちろん学ぶべきところは学校で学んで、その学んだものを地域に生かして、そしてまたそれを家庭に返すというような、そういうプロセスがあったりすると思うのですけれども、何か地域が学校にすべて頼ってしまったり、また、親がほかの教育界に頼ってしまったりしているようなところがあって、子供はどちらかというと親とか地域からどんどん離れていっているような気がしてならないんです。そんなことを含めると、やはり健全な子供の育成を願う親とすれば、やはりもう一度原点である地域で子供を育てるのだというものに立ち返らないと、自己実現であったり、先ほど知事がおっしゃったような、そういったものに近づいていかないのではないかなという気がしているんです。

これは個人的な私の体験の話なんですけれども、うちの娘が小学校の低学年のときに、学校から帰ってきたら花を一輪持っていたんです。どうしたのと聞いたら、これは私が聞いたのではなくて家内が聞いたのですけれども、そうしたらきれいだったのでつまんで

たと。でもその時に、これはその辺に咲いている花ではなくて、どこか庭に咲いている花だと。うちの家族でそのお宅を探して教えてもらって謝りに行った。そこの御家族の方が、「きれいだったから採ってしまったのだよね」の言葉をかけてくれて、子供はやってはいけないことというものを1年生のときに学んだと思うのです。

こういう近所の人たちが温かい目でいつも見守ってくれたから安心・安全が保てていて、さらに大きくなったときに、その子供たち、随分大きくなったね、あの子がもう結婚したのとか、そういう地域があったような気がするのです。ところが最近、それがほとんど感じるのが一部の田舎という言葉はよくないのですけれども、過疎化されたようなところの地帯だったり、都市部ではほとんどそういうものが少なくなってきたと感じています。

ではどうしたからいいのかというときに、やはり地域で子供を育てるんだということをもう1回埼玉県で発信をしていくべきではないかなと感じております。もちろん発信をすることによって何が生まれるかという、私が一番思っているのは思いやりのある人間がそこで育つ、相手を思いやるから自分も思いやられる感情を持って、お互いに思いやられるような環境をつくった中で人間として成長できるのではないのかなと考えるんですね。

地域にとけ込めばとけ込むほど郷土とか、先ほど知事がおっしゃったような、自分の地域に対しての歴史認識とか、郷土愛というものが醸成されてきて、それがいろんな歴史に興味を持ったりすることによって自国の文化とかそういったものに関心を持っていくのではないかなと、子供の成長過程の中で何か欠けているものが幾つか出てきてしまっているのかなという気がしています。

ですから、「一人一人がより一層大切な『人財』」となるためには、そういったものを積極的に改善をしていくという生意気なんですけれども、何らかの方法で改善していかなければ、10年後、もっと深刻な状況になってしまうような気がしています。

赤ちゃんの子育てだって、赤ちゃんを見たことがないという者が最近いるんだということも実際に聞いたりするんです。それは一人っ子で近所にも赤ちゃんがいないし触れる機会がない。そんなことも含めると、やはり一つのコミュニティというのは、やはり家族なんだけれども、家族を巻き込んだ地域なんではないか。その地域がくっついていて埼玉県が形成されていて、さらに日本まで形成されているのではないかなと思うので、そういう地域で育つ、地域で育てる、そしてその育った環境を家庭に返す、逆に地域で生きていくために必要なものを学校とか教育機関で教えてあげるといような、そういうものに埼玉教育はしていただきたいというか、するべきだと私は思っております。

○上田知事 ありがとうございます。

高木委員長が言われるのは、私に言わせると、絶対いい親に恵まれるという保証はどこにもない。いい教師に恵まれれば、それで大変ありがたいのですが、これもまた保証はないのですが、もし街がすぐれた街であったら、いい子供が育つ可能性というのは高いですね。逆に街もあんまりぱっとしなかったら、もう救われるところがなくなる可能性がありますね。街がおかしくても親がしっかりしていれば何とかなるかもしれません。学校がしっかりしていれば何とかなるかもしれません。すべて関連していると思いますが、街づくりの部分はまたこれは市町村長さんたち、あるいは議会などを中心に、また、民間のいろんなボランティアを中心にした人が育ちやすい街づくりというのはどんなものかということを経済関係者の立場から問題提起をしていくしかないと思いますが、その部分では結構埼玉県、成功しつつあるような気がして、たまたま資料の『『いい子どもが育つ』都道府県ランキング』を見ますと、これは文科省の学力テストと合わせた形で3年に1回、地域だとか道徳とか規範とか生活習慣がきちんとできているかできてないかを調査しているんですね。その調査項目の中で、埼玉県は着実に順位を上げてきているという、総合評価で4位まで上がってきているというものがあります。

それもどちらかと言えば、そういう地域とか、生活習慣だとか、そういったものが着実に上がってきて、総合順位が4位になっているというのがあります。これは大都市圏が全部苦戦して、例えば大都市圏で東京が20位、千葉が24位、確か私の記憶だと愛知などが28位とか29位で、神奈川が38位だとかでしょうか。大阪あたりが47位とか、福岡あたりも45位とか、いわゆる人口の多いところはみんな苦戦をしている。その中で人口の多い埼玉が非常に善戦しているというのは、例えば民間の防犯パトロールの数が日本全国の8分の1は埼玉にあり、ダントツに多い。あるいは学校応援団だとか、スポーツ少年団だとか、そういったものの数も圧倒的に多い。こういうことが何らかの形でいい影響を与えているのではないかなと思います。

これもいろんな関連性があるので、これぞという決定版はないので、地域でマイナスなものはどんどん減らして、プラスのものを重ねていくという方法で地域を強くしていくという形しかないのかなと思っております。

あとまた家庭のほうに入っていくのもなかなか困難な部分もあるんですけども、それもまた困難な部分を、やはり大人になったときに何をするかということをしっかり子供のときに教えておくということに繋がっていくのではないかなと思っておりますので、決定的

なものではないと思いますが、幾つか政策の中で絞り込んだものを改めて議論していたらいいかなと思っています。

どうぞ、何か。

○門井委員 「ならぬことはならぬものだ」私はこの言葉が大好きでありまして、理屈とかそういうことを抜きにして、体で覚えていくのが大事かなと思っています。

私は武道の先生方とおつき合いですることが結構ありました。その先生方は、物事を習得するにあたってのプロセスというか、段階を「守・破・離」とよくおっしゃっていました。

「守」は教えを守る「守」です。それで「破」というのは破るの「破」です。「離」というのは離脱、離れるの「離」です。この三段階を経て一流というか、それぞれの道の達人になっていくのだということです。第一段階の「守」というのは基本の型、これを徹底的に身に付けさせる、先生のまねをさせるということ、これが第一段階の「守」、第二段階の「破」は、その型を身に付けたらそれを応用することです。第三段階の「離」は身に付けた型や応用を離れて自由闊達というか、自由自在というか、そういう境地になるということらしいのですが、ただ、異口同音に先生方が言うのは、やはり「守」なんだ、この基本、基礎がないとすべて始まらないんだ。これがないと何者にもなれない、いきなり「破」でも「離」でも、そんなことはとても無理だと。何か壁に当たれば必ずまた「守」に戻るんだということをおっしゃっていました。

こうした段階を踏むには、やはり指導者が非常に大事で、どうやって指導をしていくのか、子供たちを育てていくのか、子供たちを自分の人生を切り拓いて社会に役立つような人間にさせるには、やはり最初の段階の指導者というのは非常に大事だと思います。家庭も、地域も、学校も、やはり私はそういう指導者、多くは学校の先生だとか、そういう立場にある人たちの影響が大きいだろうなと思っていますので、やはり遠回りでも学校の先生を育成するというんですか、先生がやりがいをもって教育に当たる、そういったことに埼玉県としてもっともっとやっていただきたいと思っています。私はいつも教育委員会でいろんなお話を伺って、非常にいろんな施策をやっていただいているので、先生方は幸せだなと思うところもあるのですが、やはり教師の育成にもっともっと力を入れていくべきだなと感じるところです。

○上田知事 平成17年から「規律ある態度」を唯一の教育目標という形で積み上げてきたのですが、この辺の評価というか、成果というのはどんなふうに見ているのでしょうかね。

○関根教育長 3つの達成目標の中の「規律ある態度」は、知事がおっしゃっているような『いい子どもが育つ』都道府県ランキング」にも出ていますように、かなり上がってきています。体力も全国で小学生、中学生ともに3位から5位まで入ってきています。学力については、3つの達成目標で基礎基本のレベルの部分はかなり定着してきたと思いますが、その上に伸ばして行くことが足りないのではないかと考えています。

○上田知事 応用力というか、読み込み力とか。

○関根教育長 そうですね、その辺の力の伸びが足りないというのが今の課題とさせていただきますので、新しい学力テストを実施し、学力の全体を伸ばしていきたいと考えております。「規律ある態度」については、他県から埼玉はよくやっていると言われるくらい伸びてきていると思っています。

○上田知事 一定程度のメルクマールを持ってちゃんと決めたことを直しましたかという単純なところのチェック、遅刻はどうなんだとか、忘れ物はしてないかだとか、まさに生活の基本みたいなことをずっと平成17年からやっていたことの成果は出ているみたいですね。全国のそういうモラルテストなんかで、埼玉が上位に上がってきている。困難な地域ですね、はっきり言って。こういう地域は流動性が高くて、核家族で、地域社会の教育力の弱いところですから、そういう中で埼玉は健闘している。体力の向上も健闘している。これはスポーツ少年団の団員数なんかで全国1位ですので、組織率というか、活動というか、それなんかも影響しているのかもしれませんが、いずれにしても地道にやってきた部分では成功している。

ただ、学力の部分では、比較的単純な学力なもので、ちょっとひねった問題なんかにはまだ弱いという部分があるので、それで細かい、その辺をカバーする形での指導をしっかりするための県独自の体制を今、関根教育長が問題提起しながら参加してやっているところですよ。

やはりもっともっと「ならぬものはならぬ」ということなどをしっかり断固貫くというのでしょうか、そういうのはやはり教室で言っていただくしかないですね。だめなものはだめという、理屈を超えて守る部分は守るといって、まさに先ほど教育委員が言われたように、語るというのでしょうか、守るものは守る。そういうことがいろんな形で、家庭でも何かそういうものを補助するようなものなどが必要なのかもしれませんね。

○関根教育長 埼玉の場合には、3つの達成目標ということで県として「規律ある態度」などに取り組んでいるので、学校も非常にやりやすいという話をよく聞きます。

○門井委員 その辺が上がってくるときは、基本的には学力も当然ついてくるんだと思うんですね。

○上田知事 ひょっとしたらある日から突然上がるかもしれません。助走期間が多少かかるので。最近になって上がってきているんです。実はこの「規律ある態度」も、体力も、少し助走期間がかかっているんですね、ひょっとしたら学力のほうもまだ助走期間がかかっているのかもしれないね。

○門井委員 生活習慣ができていない子供さんはやはり勉強もできないのだと思うんですね。(成果が挙がるのを) 楽しみにしています。

○藤崎委員長職務代理者 私は引きこもりの子供の家庭訪問という仕事を20年間やってきまして、(資料の)一番最初に「自らの力で人生を切り拓き」と書いてありますが、ぜひ子供たちに、社会的に自立ができた大人になってほしいというのを強く思っています。それはつまり親の力、財力に頼ることなく、あるいは生活保護といった社会支援を受けることなく生きていける大人になってほしいと思うわけです。

では不登校、引きこもりは今、現場から感じることはどういったことかといいますと、実は長期化させない必要性というのはとても重要なポイントで、子供たちを見ていますと、1年も2年も休んでいる重度の子たちは、今さらどんな顔をして学校に行けばいいかわからない。不登校になったきっかけというよりは、もう休み過ぎてしまったがためにという部分が非常に多いんですね。そういった中で、では誰が一番その解決の鍵を握っているかといいますと、実は私のように相談員の仕事をしているような専門家ではなく、やはり担任を中心とした学校の先生の方だと思います。子供は例えば担任の先生が家庭訪問をした場合、はじめは恐くて逃げたり、かくれたりするケースもありますが、先生が来てくれたことを知ると安心するんです。「あっ、自分は忘れられてなかったのだ」「先生は覚えていてくれたんだ」姿は見せなかったけれども、先生がやさしい声で、例えば「また来るね」なんて言って帰ったとしたら、まただんだん変わっていきけるわけです。今、世の中で不登校というのをちょっと難しくとらえ過ぎて長期化させてしまっていることを感じたりするわけです。

子供は思ったよりも先生のことはずっと好きですし、先生を待っていて、やはり先ほど各委員からもお話がありましたように、ではそういった先生を育てていくにはどうしたらいいかということを常に考えるわけです。

自分自身を振り返ると、この20年間で、いかに自分が例えば教育相談や生徒指導の専

門知識、特に発達障害の子供の指導法といったものを20年前に知っていたら、あのとき出会った子供をもっとうまく指導ができたのではないかという非常に後悔を持って今も仕事に臨んでいます。

今、埼玉では、どちらかというと授業改善とか、そういったものに対しては継続的に力を入れていまして、教科指導ではどの先生も様々な研修を受けることができるようになっていきます。ですから、もう少し生徒指導力というものを上げていけば、実は学力が上がっていくことにも確実につながっていく。というのは、子供はどのようにして勉強を頑張るかという、家族や先生にほめられたいとか、認められたいという、これが大きな動機になっていくと思うのです。先生の一言で、なかなかおもしろい文章を書くねと言われただけで、将来ジャーナリストになろうとか、理系的センスがあるなと言われたら、やはり理系を選んでいくことがあります。教師という仕事の醍醐味ではないかと思ひまして、ですので教員研修の充実といったものを考えていかなければならないのではないかなど。時代に即した技術的なことですか、科学的なそういった根拠も必要になってきますけれども、そのように考えています。

○上田知事 中学生の不登校がいつも大きな課題だと思うんですけれども、小学校は余りないですね。それで県の所管からはずれるところがありますね。ですので現況でこれだけ出ていますということだけをお知らせしている。それだけでも随分いい影響を与えているんですけれども。ノウハウ本とか、マニュアル本とか、そういうものはあんまり役に立たないのではないですか。

○藤崎委員長職務代理者 そうですね、実践を繰り返しながら、失敗を繰り返した先生がそういったものを読むと非常に役に立つのかもしれませんが、実践がない中でそれに頼ってしまうと、やはり心がない接し方になって、ある子供が先生ロボットみたいだと言ったんですね。その先生はマニュアルのとおり家庭訪問を一生懸命していたんです。その先生の気持ちがあったんですが、かえってそういったものにとらわれてしまって、そのようなケースもありました。

○上田知事 本当に何日か休んでいる段階で、先生が「出てこいよ」と言ったら出やすいんだよね。

○藤崎委員長職務代理者 はい。

○上田知事 それこそ本当に長く休んだら出にくくなりますね。子供たちが誘うと出やすいんだよね。

私の子供が中学生のときに毎日お誘い通学をしまして、またしばらくして、仲良くやっているなどと思ったら、またさぼったりして、その繰り返しを何回かやるんですが、それでもあきらめずにずっとしていたら、やはり最後は立ち直ったんですね。

○藤崎委員長職務代理者 子供たちが誘ったら出やすいという前提に、実は先生がいつも早くこの子を学校に出られるようになるという担任の思いを、学級経営の中ですべての子供に伝えていくんですね。そうすると子供が「ああ、先生がそう思っているんだ」ということを受けて、その子供のことを考えられるようになるので、やはり先生の力というのは非常に重要なのではないかと感じました。

○上田知事 関根教育長、そういう例えば中学レベルで実践的な不登校の子供たちを引っ張り出しているのがうまい先生とか、教頭先生だとか、校長先生などの学校というのは、その学校だけでなく、他校なんかにも指導に行ったりすることなんかあるんでしょうか。

○関根教育長 個々具体的な事例については把握しておりませんが、ベースになるクラス経営や学級経営がとても大事です。学習指導において、とてもいい指導やいい教材であっても、クラスにそれを受け入れる土壌ができていないのか、できていないのかで全く違います。同じことをやっても、やりやすいクラスとそうでないクラスもあります。そういうところを各学校にも話しているんですけども、意外と疎かになっています。

○上田知事 確かにすぐれた先生が引っ張り出しても、他の担任の先生だとか教頭先生とか引っ張り出しても、戻したところの教室の雰囲気が悪かったらまた家のほうに戻ってしまう可能性がありますね。確かにそうですね。引っ張り出す技術とか、情熱だとかハートの部分で引っ張り出されても、教室に戻ったところのハートが弱いと確かにそういうものがあるかもしれませんね。

○関根教育長 こういうところの研修について、藤崎委員から何度か伺っているので、どのように深めていくかということは研究していかなければいけないと思っています。学力向上では埼玉県は、伸びしろが多いので、そこを伸ばすためにも、人間関係づくりを行う担任の指導力が大切です。高校でも担任がそういうクラスづくりをしているクラスと、そうでないクラスでは教科担任としては全く違ってきます。例えば体罰がいろいろ問題になっていますが、体罰をする先生というのはある意味で指導力がないですね。体罰によらない指導力をどうもてるかということが重要です。生徒指導の話ですから。そうした力をつけるためには、全教員対象に研修をしていかないとならないと思っています。

どういうふうにしていけばいいのかということについては、知恵を集めて、しっかりと

研修の中でやっていけるようにしていきたいと思います。

○上田知事 高校の中退率を減らす、高校は我々が責任を持っているわけではないですか。高校の中退率を減らすには、中学生なんかの不登校率を減らすのが早道でもあるのですね。実は。

○関根教育長 実はかなりやってきましたので、高校の中でもノウハウの蓄積があります。

○上田知事 そうですね、関連しているから高校の中退率も減ってきているんですね、中学の不登校率が減ってきているので。

例えばこういうことは可能なんですか。例えば川口なら川口市に絞ったようなことで、川口市の中の中学校でどこが不登校が多いかとか、そこを集中的に、川口だけではなくて、他の市町村なんかでも、あるいは県の教育委員会でも、そういう指導力のある人などが集中的にそういったところに助っ人に行くとか、その原因と対策を探って集中的にやるというようなことなんかは可能なんですか。

○関根教育長 考えていかなければならないことと思います。教育委員会で第三者評価の話をしたときにも、まさにそうした話が出ました。特定のところにポイントをあててやっていくという手法も考える必要があります。高校の中退防止においても、同じ手法で、中退者の多い学校に、ノウハウをつぎ込んでいるということがあります。県全体とか、県からどこどこ指定するのは難しいのですけれども、手を挙げてもらってやるということは可能と思います。

○上田知事 都県境の市町村というのはみんな苦戦しているんですね。そういう問題に。不登校に限らず、納税率だとか、いろんなもので。川口の市長さんも今、張り切っていらっしゃって、いろいろ最下位レベルみたいなのが結構多いもので、それを伸ばしたいとすごく張り切っていらっしゃるので、場合によっては市長さんと、市の教育委員長さんや教育長さんなんかと少し話し込んで、集中的にやって、一気に成果を上げることなんかをやれば、他のところでそういうことがどんどん進んでいくのではないかなと思いますけれども。

○関根教育長 特に今回は新しい学力テストを実施しましたので、特に経済的な問題などで苦戦している子供たちをどういう形で指導・支援していくといいかということについては、市町村から手を挙げてもらって取り組みを始めています。パイロット事業として、こういう課題についてやりたいと、手を挙げていただいて、そこに県としてもいろいろな支

援するという事は今もやっていますし、可能だと思いますので、工夫していきたいと思っています。

○藤崎委員長職務代理者 川口に関していえば、例えば今、芝園団地ですか、非常にたくさん外国籍の家族が暮らしていて、地元の小学校ではもう学区内でグローバル化が始まっているわけです。そういった中で子供たちが学び合っているとか、日本の子供が世界に出ていくだけでなく、日本の中で一緒に共生を図っていくという意味でも考えていく必要がありますし、今、教育長のお話を伺っていたときに私がちょっと思い出したことがあります、いい先生というのは、実はその地域、自分が通う学校の地域をすごく愛しているとか、おいしいラーメン屋を知っていますし、ここの居酒屋はいいとか、どんな花が咲いているとか、とにかくその地域を大事にして教師をやっているんですね。

ですから、子供たちがちょっと学校でうまくいなくても、先ほど委員長がおっしゃっていた地域の中でいかに学校というものが、それから、先生が結局地域につながっていくかというところで、実はそういったことがすべて不登校をなくしていったり、非行を防いだり、学力を上げていったり、魅力ある高校をつくれれば、不登校の子供もここに行きたいと思っています。ですから、具体的に君はこういうふうにやったら、この高校でこんなことが勉強できるんだよというように、魅力ある高校づくりによって、不登校というのがやはりここは全国一少ない水準へと（資料に）書かれていますが、こんな目標ではなく、全国一少ない埼玉県を目指そうと私は考えるべきではないかと思います。

○志賀委員 私は母親ですので、子育てのやはり最終的な目標の一つに子供をその子なりの自立をさせていくことが一番大事なことであると思っています。先ほど知事のお話にもありましたように、社会に役立つ人財ということ、私が好きな言葉で恩返しというものもそうなんですが、「恩を送る」という言葉が私はすごく好きで、恩を返すというのは恩をいただいた方にその人に返す、恩を送るというのは、いただいた御恩を次の世代に送っていくそうなんです。

やはり子供たちが社会に関わって自分が育てられ、もちろん親もそうですし、地域の方や、学校の先生や、いろんな方からすごく自分が御恩を受けて、ここまで成長できたというふうに認められて、本当に見守られる意識というものが育っていけば、将来に自分の恩を返したいと思うと思います。ただ、恩を返すと言ったときに、私もそうですが、今思い返せば、昔、近所のおじさんやおばさんに育てられた記憶もあり、もちろん親もそうですが、地域のお兄さん、お姉さんにも育てられてきました。そういう方たちに今恩を返した

くてもなかなか恩返しはできない。それなら自分がいただいた御恩を次の世代に送っていくということがやはり大切だなということを常に子育てをしながら感じます。

子育てはもちろん親が基本をしっかりとする話もありますが、一番最初は「ならぬものはならぬ」ということは、親が一番近くにいるわけですから、もちろん指導していかねければいけないのですが、やはり地域の人たちが注意をしてくれたり、しかってくれたり、先生たちも自分の子供のように体を張って怒ってくれるとか、そういったすべてのサイクルが子供たちはみんなで育てようというふうになってもらうと、非常に子供たちも生き生きと、そして何よりも自己肯定感が育っていくと思うんですね。すべてが自己肯定感が育った子供というのはやる気がありますし、やる気が出るということは、遊びにも、勉強にもつながっていくことだと思うんです。

ですから、高校になって、さあやる気を出しなさいというのではなくて、もっと幼児教育とかも、小さいころから、できれば周りの環境が子供たちを育てていく、一番やる気のある子供というのは、多分これは貧困家庭でもよく言われていますが、そういったところでも例えば本当に実質金銭的に困っている家庭があったとしても、地域の人たちの助けや、精神面の支えや、求められる意識が育てば、また金銭とは別のところで育っていく可能性は十分あると思うのです。

ですので、子供は社会の宝だということで、多くの人で育てられている、それで一つの活動として異世代との交流、赤ちゃんとのふれあい事業というのも、そのうちの一つになるんですけども、赤ちゃんを子供が抱っこすることで将来、自分が結婚することや、将来の夢が具体的に描けなかったとしても、漠然としたポジティブなイメージが、家族というものはいいものだと思えるような意識、そしてそういうものが育つには地域の人たちの関わりや、いろいろな声かけや、そういったことが子供の心をポジティブに育てていくことも可能だと思います。赤ちゃんがかわいいと思って幸福感に満ちあふれる思いや、そういったことがイメージできれば、多分自分の将来も今は万が一不幸であったとしても、そういったポジティブなほうに結びつくこともあるであろうと思うのです。

だから世代交流というものは、兄弟が今なかなか少なくなっていますし、核家族化で非常に一日に話す機会というのが少ないですね、大人も子供も。とにかく多くの人と横の結び付きをもって、なるべく多くの価値観を子供たちがもてるように、その中から自分に合った価値観を選べるような環境づくりといえますか、そういったことを意識して、学校側も、家庭もすべてひっくるめて考えていくことがこれからは必要かなと感じています。

○上田知事 ありがとうございます。

自己肯定感というか、それがあつた人とない人では全然変わりますね、生き方が。物事を否定的に考える人と肯定的に考えるのでは天と地の差が出てきますね。時間の経過とともに。

そこで資料には自分は「一人一人がより一層大切な『人財』」ということで、比較的不易ではないかという部分を抜き書きをさせてもらったのですが、これが欠けていますよというようなものがないでしょうか。こういうものの中に。あるいはちょっと重なっているのではないかと、整理はまた事務方でしてもらってもいいと思つていますが、これは入れておいたほうがいいのではないのでしょうか。

○藤崎委員長職務代理者 食ということで、農業とか、林業とか、それから、漁業、そういったものにも繋がると思うのですが、子供たちが特に一緒にごはんをつくつて食べる、あるいは薪でごはんを炊いたり、そういった中で子供はどんどん元気になっていくんですね。

○上田知事 作業が必要なんですね。

○藤崎委員長職務代理者 はい、それがやはりみんなで一緒の釜のめしを食うという言葉がありますけれども、そういった中で子供を育てていけたらいいのではないかなということとは感じます。

○上田知事 文言で言つたらどんな感じなんですか。

○藤崎委員長職務代理者 この郷土食にもつながつたり、あるいは和食が文化遺産にも選ばれましたけれども、日本の昔からのごはんというのも大切ですね、ぬか漬け、みそ、しょうゆ、そういったものをまた次の時までを考えていきたいと思うんですけども。

○上田知事 体験学習を含めたものでしょうね。

○藤崎委員長職務代理者 はい。

○上田知事 臨海学校だとか、林間学校だとか、そういうところで一生の友達ができたりしますね。あっさりと。あとお互いに誤解していたことが打ち解けてみたりしますよね。

○高木委員長 当たり前のことだと思つてはいいんですけども、思いやりのある人というのを訴えてほしいな、やさしさがあるとか、当たり前だと思つてはいいんですけども、意外と大事なことで、ちょっと見忘れてしまう。自分でもよくあるんですけども、ちょっと思いやりがなかったかなとか、つまらないことでそんなことを思つてもありますけれども、やはりそういうものが根底にあるんだと思つてます。もちろんこの中に含まれているんだと思つて

ですけれども、書く必要があるのかないかわかりませんが、実はそういうものを入れていただけたらなと思うんです。

○上田知事 どうなのか、私もちょっと。

○高木委員長 次回まで皆さんもしお考えでしたら。

○上田知事 議論のたたき台としてメモをしましたので。

時間もちよっと限りがあるので、例えば10年後の社会状況に合わせて特に課題とか、こういったことをクリアすべきだということについて移りましょうか。

それについての資料が出ております。

とにかく働き手が減る時代になっていきますと、当面まだ少子化が加速します。人口を増やさなければという課題が大きくなってきていることは事実です。県としてもその取り組みをしようという形で今年度もいろんな予算化をしたりしています。

ただ、一般的に言うと、あと30年ないし35年間ぐらいは人口が減る状態です。今、正しい政策をやれば35年ぐらいから反転する。そういうことが可能だと思っています。30年ないし35年で反転する。

260万人ぐらいの層の山がなくなるとバランスがよくなるのかもしれない。あと私もこのごろというか、比較的この1年ぐらい前に気付いたのですが、日本の社会は4人家族をモデルにしているのですね。ありとあらゆるところで。これは致命傷でしたね。実際子供を育てたいという人たちの希望は3人なのに2人で留まっている。なぜかという、子育て、教育にお金がかかり過ぎる。それから、部屋が狭い、特に都市近郊のマンションは3LDKが基本のモデル。都市再生機構の住宅も、県営住宅もやはり4人家族がモデルになっている。子供が3人産まれたら基本的には家の構造上、難しい。和光の市長さんなんか冗談で言うんですけれども、冗談だけでも本気なんですね。3人子供がいるので、とうとう自分と妻の部屋を明け渡した、ソファをごみにして捨ててリビングルームに妻と私は寝ている。そういう構図になってしまった。早く大学生が卒業してどっかに行ってくれないかとか、寮か何かでも入ってくれないかとか、それをひたすら待っていると。でも笑えない現実がそこにあるんですね。現実には。

だからこれも国を挙げての住宅政策なんかで、都市近郊のマンションを3Lだけではなくて4Lと半々ぐらい作っていくようにしないと、標準規格でないので4Lが無茶苦茶高いんです。1割面積が増えるのに値段が4割から3割5分ぐらい高くなるのです。1割増えるんだったら普通は1割値段が高くなるだけの話です。ところが実際は3割ないし4割

高くなるんです。やはり規格が違うので高くつくようになっているんです。だから県営住宅でもやはり5人家族が住めるような、ちょっと部屋数の多い県営住宅をつくらなければいけないし、それから、都市再生機構なんかもそういうようなことを考えなければならぬし、あるいは市町村レベルでも、市営住宅、村営住宅なんかでもそのうち考えなければいけないし、民間の戸建ての場合は比較的4L以上が多いんですけども、ただ、現実には人口が密集している都市部ではマンションが多いですからね、そういうのも必要がありますし、それから、例えば3人目はもう子育ての費用だとか、教育の費用は3人目は全部無料にするとか、そういう施策が必要かもしれません。これは予算の重点配分をどうするかという問題ですから、そういうことも考え始めて、一部埼玉県でそれをし始めました。

ただ、実効性がどの程度あるのかもチェックしなくてはいけないと思いますが、それもチェックしたいと思っています。そういったところをやらないと人口の維持ができないという、人口の維持ができないということはどういうことかというのは大体地方のローカル市や小さな町や村を見ればもうわかることですから、非常に危険だということですね。食い止めなくてはならない。

それから、2番目の産業構造の変化もそうなんです、やはり経済のグローバル化というのが一つの宿命みたいなところがあって、これからもどんどん進む。こういう認識でいなくてはいけないので、世界で通用する語学力が必要になってきている。これも間違いない事実です。ますますIT等々が必要ですから、そういった意味での技術を学ばなくてはならないし、それから、製造業がどんどんロボット化していくので、一定程度の人手が少なくなっていくって、その分がサービス産業のほうに進んでいくと、今度は高校なんかでも職業教育なんかをどうするかとか、そういったことも考えなければいけないと思いますし、一方で中堅の技術者が結構必要なところもたくさんありますので、そういう中堅の技術者をどこで育てるか、中途半端な総合大学に行くぐらいだったら、総合高校で技術を学んで、あるいは場合によっては専門学校に行ったり、短期のそういう専門的な技術を学ぶという、そっちのほうの方が人生としてはまさに前向きな話になってくるとか、そういうことも起こり得るのですけれども、何となく平坦に、短大よりも4年制大学とか、何かそういうのがふわっとなっていますので、価値観が何となく職業高校だとか、総合高校の職業科みたいなもののほうが普通高校なんかよりもランクが低いみたいなイメージがあったりして、必ずしもそういう職業人を育てることができないようになっているのではないかとか、こういう価値観なんかをどこかではね返すような仕掛けが必要ではないかというような問

題意識を持っています。

先ほどから議論になっているように、やはり非常にこれから人材不足ですから、これから一人も取りこぼしが無いような形でまさに不登校や引き込みの結果を避ける、あるいは発達障害などが例年数が増えていますので、早期に発見をして、支援をして、社会に貢献してもらえようことを意識していく。

例えば他のことを言えば、発達障害が重くなってほとんど就労不可能という状況の方であれば、即高卒でも生活保護ということもあり得る。そうすると70歳まで生きたらこの方は8,000万円ぐらいの生活保護費が必要になる。もし軽微な、非常に軽い発達障害で、社会に出て活躍することが可能な状況であれば、この方は1億9,000万円高卒で稼ぐことが可能だと。往復で2億7,000万円、社会的な価値を作り出す可能性がある。それが逆に2億7,000万円の社会的マイナスになる。これもやはりそういう部分も一人の重度な障害者で終わってしまって何もできないという状態になったら、この2億7,000万円を社会全体でカバーしなくてはいけないということですので、発達障害とかそういう関係の早期支援なんかも重要な課題で、県としても非常に丁寧に進めています。画期的な動きをしていますので、多分ここ何年か間に、多分またこれも厚労省のモデルになって、日本全国が埼玉県のまねをしなくてはいけないと思うのです。それだけの中身があると思っています。

そういうことを含めて、10年後の社会状況を意識した上での、多少高校の再編成などで、もう進めてきた部分があるのですが、こういったものを含めて教育委員の皆様からまた関連な意見をいただいておりますので、参考にしていきたいと思っていますので、お願いいたします。どうぞお願いをします。

○高木委員長 10年後の社会状況を踏まえて、今、一番心配しておりますのが、正規雇用には就かない若い人たちが増えてきておりますね。それはやはり子供のころから夢を追いかけて、これになりたいとか、例えば小学校の低学年のときに、将来、お菓子屋さんになりたいとか、パティシエになりたいとか、そういう夢を持っている子供がどんどん成長していくと、高校生ぐらいになると夢がなくなってしまうというか、夢が見つけれなくなってしまう、将来の進路が見えなくなってしまう。その辺を何とか常に進路を意識したような教育といいますか、そういうものをつくっていかないといけないのかなと思っています。

では具体的にどうしたらいいのかというと、やはり常に社会、そういう実社会と繋がっ

ている、体験をさせることであるとか、例えばよく企業見学とかありますけれども、これからは企業の方でも大切な人材になってきますから、企業の方から会社紹介じゃないですけども、いろんな学校に行って、自分の企業はこういうことをやっているんだ、ぜひうちの会社に来ないかというような、産学連携のような、将来の進路に向かってそういう道筋をつくるような仕組みが必要ではないかなと感じています。それを具体的にはどうしようかという、これからまた考えなくてはいけないと思うんですけども。

それから、もう一つが特別支援教育などを受けている子供たちにとってみれば、可能性としては、本人ができる仕事は多分たくさんあると思うのですね。ただ、それを見せてあげることがなかなかできない。逆にそういう見せる機会がないのだと思うんですけども、そういうロールプレイングができるような、これも企業の協力を頂いて、そういったウェルカムで広くおいでよというような企業をたくさん埼玉県内につくっていくという、逆の立場、そういう政策も必要なんではないかなという気がしています。

○上田知事 おっしゃるとおりですね。

今の高校の再編成なんかも含めて、こういった産業構造の変化を踏まえた形での高校でのいわゆる専門教育の部分なんかの強化みたいな動きがあるわけですね。

○関根教育長 子供たちの人口も減ってきますし、労働生産人口も減っていく中で、高校の再編整備も考える必要があります。今年は「魅力ある高校づくり課」をつくりましたので、先々どういうふうに県立学校を魅力あるものにしていくかということは当然検討をしていきます。

今年取り組んでいることで、夜間定時制の子供たちへの支援があります。夜間の子供たちは、不登校経験者など様々な生徒がいるので、必ずしも働いているわけではないのです。ほとんど働いておらず、昼間があいているので、この昼間に民間でアルバイトをしてみようと考えています。そこでいろんなことを経験し、卒業時に採りますよといってくるような企業を探しています。そうした企業と連携しながら在校中から技術を身に付けていく、学校のほうでは基礎学力を付けていく、そういう対応をしていこうと考えています。企業と連携しながらやっついこうということを今年、事業化しました。また、専門高校ではかなり昔から企業と連携しているいろんなことをやっています。中学校から高校に行くときに、中学校の先生はほとんど普通科出の人で、専門高校のことは余り御存じでなくて、また、保護者の方々も昔のイメージがあるので、専門高校を敬遠するという傾向があります。

今、中学校の進路指導もどういうふうに変えていくかという研究を去年から始めており

ます。

また、魅力ある県立学校をつくる時にも、中学の教員にも入ってもらって一緒にやっ
ていこうと考えています。中学校の進路指導や教育課程を高校と繋げていくことによって、
高校がどういうことをやっているかというのがわかる、そこが一つ大きいのかなというこ
とで、取り組んでおります。

○藤崎委員長職務代理者 これは余談になってしまうかもしれないのですが、先ほど教育
長がおっしゃった不登校の子が定時制に行くというケースが増えてきたということは、実
は国で夜間定時制高校の概念そのものを考えていかなければいけないのではないかなと考
えています。

専門高校や総合学科をいかに充実させて、子供たちが体験してから自分の職業を考
えるというような高校での教育をぜひ力を入れていながら。

○上田知事 一旦体験をする。

○藤崎委員長職務代理者 体験をした上で自分の職業を決めていく。なぜそう思うかとい
いますと、実は大学の不登校の相談も増えていまして、ときには一人暮らしのアパートの
中で大学に行けなくなって、引き込もっていて、大学でも非常に難しく、ただ、ところ
によっては大学で先輩を付けて、欠席をチェックして、その子のアパートまで迎えに行っ
ているような大学も出てきているくらいです。

○上田知事 大学生の不登校ですか。単純にいろいろ目的があって休んでいるわけではな
くて。

○藤崎委員長職務代理者 やはり友達ができないとか、それから、受験勉強はやってこ
られたんですけども、大学でいきなり自分で考えていろんなことをしようと思った段階で
できなかったり、チームでやるような実習で周りの友達とコミュニケーションがうまく
できない。そういうことで、高校の教育というのはとても大事なもので、専門高校や総合学
科のあり方を考えていくチャンスだと思います。

あともう一つは、実は中3で、中学校を卒業して、僕は高校に行きたくないから、すし
職人を目指しますという、若者に会う機会がありました。中学を卒業して、その世界に入
ったからこそ一流になれるという職業も日本の伝統業の中にはたくさんあるのではないか
と思います。またその子がいつか勉強したくなったら、それこそ夜間定時制だったり、あ
るいは昼間、早朝定時制だったりというのもあり得るのかもしれないなと思いました。

○門井委員 若干記憶があいまいですが、「この世界は誰がつくっているんだ、俺だ」とい

うテレビコマーシャルがありますけれども、やはり私どもが育った日本というのは技術力が高く、職人さんがすごく優秀で、例えば大企業でもつukれないようなものを、中小企業でつukるなどすごい技術を持っている人がたくさんいると思います。そうしたことを聞くと、日本はすごい国だなと思うんですけども、果たしてこの先、そういう社会が続くのかと思うと、職人的な技術よりも、いわゆるデスクワークみたいな仕事があるようなことが世の中の風潮としてあるのではないかと感じております。日本の技術力の低下を非常に心配しています。

ですから、やはり実際に社会で仕事をしている人を尊敬できるというか、そういった意識を子供たちに持たせるような教育といいますか、そういうところに力を入れていってほしいなという思いはずっとあります。

○上田知事 ある時期、日本の高度成長の始まりのころは比較的初級の技術者が必要だったので、中学卒業の集団就職なんかの人たちが必要だったと。それから、高専とか、そういう人たちを必要とするようになった。ある時期からホワイトカラーが中心になって、どんどんITや、あるいはそういう全体としての日本の世界の工場から、そうでなくなっていくプロセスの中で、管理部門も要らなくなってくると、当然製造部門がなければ管理部門もない。そういう中で必要なのはサービス産業のほうにどんどん移っていく。一方では、ここだけは負けないという技術を保持するために、一定程度の技術者の確保をして、それも大学院の工学の博士みたいな人たちの技術者もいるのですけれども、それをカバーするというか、補佐する中堅の技術者もいないと話にならないわけですね。そういった部分が実は抜けてきているのですね。二極化してきているというか、そういうニーズがあるんですが、この辺、産業構造の変化を正しく捉えて、高校などの教育における、これは大学なんかでももっと必要かもしれませんが、何らかの形でそういう中堅の技術者を排出する仕組みというのが現実問題として必要になってきましたね。

○関根教育長 工業高校は就職率が100%で、中小企業だけでなく、いろいろな企業に就職できます。分析したところによると、同じ学力であれば、専門学校に行ったほうがその先の人生がよさそうです。技術も身に付く、学力や基本的な生活態度も身に付きます。専門高校は企業と繋がりががありますので、より厳しく教えています。またものをつくる時には、きちんとしていないといいものがつくれませんので、そうした技術力はかなりあると思っています。

ただ、先ほど申し上げたように、中学校の進路指導というところに少し問題があります。

我々がまだ子供のころですと、専門高校へかなりレベルの高い人たちが行ったんですけれども、変わってきています。きちんとした技術を身に付けるということが大事だということを最近理解されつつあり、大学生にも、きちんと自分の身に付ける志向が高まってきています。世の中では大人よりも若い人たちのほうがそうした感覚をかなり持ってきています。自分が生きていく上での本能でしょうか。分かっていますよね。そういう点を踏まえて高校の再編整備を含めて考えていきたいと思っています。きちんとした力をつけていくための魅力ある高校づくりと、そこに向けての中学校の進路指導、この両輪としてやっていくことによって、地に足のついた力をつける子供たちに育てていけるのかなと思います。高校ではかなり企業と連携していますから、それをもっと進めていきながら、今のお話を具体的にしていく必要があると思っています。

○上田知事 次回の会議以降で産業構造の変化とからんで関根教育長、高校再編成と職業教育というのでしょうか、そういったものの展開がどうなっているのかを資料で一回議論しておいたほうがいいかもしれませんね。

○関根教育長 わかりました。

○上田知事 内容的には相当できていると思っていますが、一度皆さんたちにもプレゼンしておくほうがいいのではないのでしょうか。

○関根教育長 はい。

○上田知事 限りある時間が迫ってきましたので、きょうの議論の中で、やはり限られた人材を確保していくというか、そういう部分でも今、比較的的成功している部分と、まだまだ発展途上というのでしょうか、まだまだ課題を抱えたままなかなかまだ成果を出しきっていない部分とか、そういうものの資料なども今度は提供していただいて、皆さんからも少し意見をいただいてもらったらいかがかと思っています。きょう結構議論が出ていますので、そういったものをお伺いしたいと思っています。

あと残り時間が6分ぐらいになってしまいましたので、ちょっとこれは言うておかなければという部分をよかったら志賀さん。

○志賀委員 学校教育の中で、親になるまでの学びということを入れていただければいいなどと思っています。やはり子供たちにももちろん先ほど言ったような家族に対する、家族形成に対する前向きな情報であるとか、あるいは例えば少子化に歯止めをかけるという意味でも、心身、体の成長であるとか、女性はやはり私もそうですけれども、年齢がいつから妊娠して無理すると流産する可能性もすごく高くなってしまいうんです。そういったこと

を何も知識がないまますごく大切な時期を過ごしてしまう。ですから、妊娠適齢期など子供たちに少しそれを考えながら人生設計も考えていくということも必要なのかなということを感じています。そういったことも考えながら女性の社会進出も全体的に考えていただければいいなと思います。

○上田知事 そうするとやはり女性の社会進出というのは条件が必要ですよ。産み育てるという大業がありますからね。これはもう極めて大事な仕事で、これをしっかりカバーできるような仕掛けがないと現実にはうまくいかないですね。

親になるための学びみたいなものが、何らかの形で教育課程の中で一つのテーマになっておくべきだということですね。

現実の教育の中では親になるための学びみたいなものはどこかであるんですか。

○関根教育長 はい、今家庭科もありますし、いろんな形でやっていますし、また県議会でもそうした質問がありましたので、学校にも働き掛けをしております。

○上田知事 今度はそれを具体的にどういうカリキュラムというものが現実に行われているのか、今度は資料をお願いいたします。

ほかどうぞ。

○藤崎委員長職務代理者 先ほど志賀委員からお話がありましたが、個人的なことを言いますと、20代後半から30代、本当に仕事のおもしろさに憑かれてしまって、自分の人生設計というのを実はあまり考えない世代で、同世代は子育てに専念するか、仕事でやってきたかというどちらかというに分かれてしまうんですね。この年になってよくわかるということは、やはり母となるということは非常にかけがえのないことで、若い世代に妊娠適齢期といった妊娠に関する知識なんか広まってきているので、とてもそれはいいことだなと思います。少子化を減らしていくためには働く女性を応援することが重要だと思います。その一方で、やはり3歳まで母親がそばにいるのはとても大事でして、今、育メンというものがはやって、夫婦で育てるというのはとてもいいことなんですが、やはりお母さん、母性というものが子供にとって大事だと思います。

○上田知事 そちらはかないません。

○藤崎委員長職務代理者 ですから、本当に女性の社会進出を心から願いつつも、子供を育てて、母として、そしてまた社会で現実に仕事をしていける人生を送ってほしいというのがとても強い願いですね。

○上田知事 22歳で仮に社会に出たりして、ちょうど適齢期に仕事がおもしろくなるの

ですね。3、4年たったり、5、6年たって、それがちょっと悩ましいところなんですね。結婚適齢期なり、出産適齢期にどうかするとおもしろくなる。だからそこで皆さん、一つ選択肢が出てくるわけですね。

○藤崎委員長職務代理者 妊娠適齢期といったことを教え、考えさせることだけよりも、ここで赤ちゃんとふれあう体験なんかも実に感覚的に考えられるようになっていいのではないかと思います。この資料を見せていただいて、高校でもいいのではないかと強く思いました。男の子も女の子も、つき合っている相手もいる年頃でしょうから、自分たちのそういう恋愛だとか、結婚して家庭を築くといったことをいろいろと考えていってくれるのではないのでしょうか。

○上田知事 埼玉も状況がよくなってきたのではないのでしょうか。私なんかの個人的な例で言うと、私も女房も九州がふるさとで、女房の出産のときは、女房のお母さんが1週間ぐらい来ておりましたけれども、それ以外は結構困難なので、子育て専念の、私がこういう仕事ですので、専業主婦になるしか方法がなかったんですけれども、近場にお姉さんやお母さんがいれば違う人生もあったのかもしれない。多分今の若い方々には、お父さん、お母さん、近場にいる可能性が高いですね。多分ほかの世代の人たちは、みんな遠くにいたのではないかなと思います。(埼玉県の人口)240万人しかいなかった人口が一気に700万人になったわけですから、その500万人ぐらいの人たちのうちの半分ぐらいの人たちは地方から出てきていますから、お父さん、お母さんは地方にいるので、出産の1週間とか、そういうのは出てきてくれて、あとはなかなかお手伝いできないので、今は比較的、私の妻も今は娘と姪っこの子供たちのお世話にときどき出かけていますね。そういう条件が少し出てきているかもしれません。ひょっとしたら子育てもして、場合によっては比較的早めに社会復帰をするということも可能になるかもしれません。いずれにしても大事な話ですので、また議論が必要かもしれません。

時間になってしまいました。意見があるかもしれませんが、どうしてもというのはあとでまた県の教育委員会の事務局の方に言っていただければと思います。

次回の日程についてまた改めて、それぞれの委員さんの御都合とかも確認しながら調整をさせていただきますので、よろしくお願ひしたいと思います。

今日は活発な議論ありがとうございました。

○関根教育長 知事さんありがとうございました。

それでは、以上をもちまして第1回埼玉県総合教育会議を閉会といたします。